

## 2026年1月18日 説教「病の霊につかれた女の解放」

ルカの福音書 13章 10～17節

ルカの福音書の学びを続けます。13章は前段において、すべての人が悔い改める必要があることを述べた後に、たとえ話をされました。それを通して私たちにも憐み深い主がいてくださることを学んだことでした。

### 1. 女を癒されるイエス (10～12節)

#### ①安息日に会堂で教えるイエス (10)「イエスは安息日に、ある会堂で教えておられた。」

安息日(シャブバース)と金曜日日没から土曜日日没まで。この日は十戒の第四戒にこうあります。「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ」(出エジプト記 20:8)。この日は霊肉の安息の日として、礼拝をささげてきたのです。イエスはそのことに基づいて、会堂で教えておられました。

#### ②18年も病の霊につかれた女(11)「すると、そこに十八年も病の霊につかれ、腰が曲がって、全然伸ばすことのできない女がいた。」

そこに一人の女性がいました。その人は18年もの間、病の霊につかれていたのです。病の霊とは16節を見ればわかるように、サタンの支配の下にある霊でした。彼女はこのことのゆえに、腰が曲がり、全く伸ばすことができませんでした。彼女は病の霊につかれて、その魂も相当に追い詰められていました。

#### ③癒しの宣言(12)「イエスは、その女を見て、呼び寄せ、『あなたの病気はいやされました。』と言って、」

イエスは、その様子を見ながら、「こちらに来なさい」と彼女を呼び寄せたのです。そして、宣言されました。「あなたの病気は癒されました」という優しく力強いお言葉でした。それは、彼女の心の奥底までに届くようなお言葉でした。

### 2. 安息日の癒しを憤る人 (13～14節)

#### ①癒された女(13)「手を置かれると、女はたちどころに腰が伸びて、神をあげめた。」

イエスは宣言のお言葉を言われるのと同時に、彼女に手を置かれました。その瞬間、彼女の腰は伸びました。彼女は癒されたのです。腰だけでなく、彼女の魂も癒されました。だからこそ、彼女はその時に神をほめたたえたのです。悪霊から解放されて、その魂は神へと向けられたのです。

#### ②会堂管理者の憤り(14節後半)「すると、それを見た会堂管理者は、イエスが安息日にいやされたのを憤って、」

さて、その出来事は周りの者にとっても、驚きでありましたが、不満と憤りを持つ人がいました。それは会堂管理者でした。会堂管理者は建物の管理ばかりではなく、礼拝が伝統に従って行われるかを見守っていました。今、彼にとってイエスが安息日であるにもかかわらず、癒しのわざをなしたことに憤りました。なぜなら、安息日には「どんな仕事もしてはならない」とあるからです。その秩序を乱されたと思ったのです。

③会堂管理者の意見(14節後半)「**群衆に言った。『働いて良い日は六日です。その間に来て直してもらおうがよい。安息日には、いけないのです。』**」

そして、群衆に言いました。「働いて良い日は六日です。安息日には働いてはならないのです」。そしてさらに、「もし直してもらいたいと思うなら、働いて良い日にやって来なさい」。この言い方から見ると、会堂管理者はイエスの癒しのわざは否定していません。あくまでも、癒しというのは「働き」であるという理解です。もちろん、会堂管理者が、イエスに対しても相当の怒りを向けていたことには違いがありません。

### 3. 安息日にも困った人がいる (15~17節)

①あなたも安息日に牛やろばに水を飲ませている (15)「**しかし、主は彼に答えて言われた。『偽善者たち。あなたがたは、安息日に、牛やろばを小屋からほどき、水を飲ませに連れて行くではありませんか。』**」

ここで主イエスは会堂管理者に言います。律法学者やパリサイ人には何度もその言葉を使いますが、ここではこの会堂管理者にも、「偽善者たち」と呼び掛けています。そして、説明します。「あなたがたは、安息日に、牛やろばを小屋からほどき、水を飲ませに連れていくでしょう」。それはそうです、牛やろばは生身ですから、必要な量の水を摂取しなければ生きていけません。そのためには、牛やろばを飼っている人は安息日でも働かなければならないのです。

②サタンの縛りからの解放 (16)「**この女はアブラハムの娘なのです。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。安息日だからといってこの束縛を解いてやってはいけないのですか。』**」

主イエスは言われるのです。牛やろばでも配慮されているのですから、まして、彼女はアブラハムを始祖とするイスラエルの民の子として生まれたのです。しかし、彼女はこの18年間、サタンに縛られて、その肉体には不自由があり、その内側も苦渋に満ちていたのです。それは明日でも良いというのではなく、たとえ今日が安息日であっても、霊的解放をしてあげるべきではないのですかと、問われたのです。

③反対していた人々も恥じ入り (17)「**こう話されると、反対していた者たちはみな、恥じ入り、群衆はみな、イエスのなさったすべての輝かしいみわざを喜んだ。』**」

イエスのお言葉を受けて、イエスに反対していた者たちも、納得したようです。ここでは「恥じ入り」とありますが、自分たちが見ていたことが律法的で、一面的であったと思ったことでした。また、そこにいた群衆はみな、イエスのなさった霊的解放の出来事と、イエスの教えられたすべてについて、「輝かしいみわざ」と受け取って喜んだのでした。

### 《展開と結論》

ルカの福音書には、他にも安息日に関する記事があります。6章1~5節には、弟子たちが麦の摘んで食べたということで、パリサイ人から安息日違反だと責められました。それに対しイエスはダビデが神の家に入って供えのパンを取って、自分や供の者が食べたという例をあげながら、「人の子は安息日の主です」(5節)とされています。その後には、別の安息日に会堂で教えておられ時に、右手のなえた人がいたのです。律法学者、パリサイ人はイエスが癒しをするかどうかを見ていました。主イエスはその右手がなえた人を前に立たせた上で、人々に尋ねられたのです。「安息日にしてよいのは、善を行うことか、悪を行うことかいのちを救うことか。それを失うことか」と言われ、「手を伸ばしなさい」と言われたのです。その男の右の手は元通りになりました。14章に1節以下に、律法学者やパリサイ人がいるところで、水腫を患っている人をイエスは癒されたのです。そして言われました。「自分の息子や牛が井戸に落ちた時に、安息日だからといって、すぐにひきあげないのですか。」とたずねておられます。

安息日とは何でしょうか。ひとことで言えば、この日は霊的な安息の日です。「安息日を覚えて、これを聖とせよ」という戒めは生きているのです。創造主なる神は、天地万物を六日かけて造られましたが、七日目には休まれました。それは、七日目に霊的休息をとることを教えているのです。その事実は、公的礼拝をささげていくことの礎ともなっています。

この日はキリスト教会にとって、公的礼拝をささげる日ではありますが、ある面では忙しい日です。となると、そこは休みではなく、活動的になってしまうこともしばしばです。だからこそ「どんな仕事もしてはならない」(出エジプト20:10)とあるのです。

まずは共同の礼拝をささげること集中しましょう。そして、霊的休息をいただくことを求めていきましょう。しかし、共に礼拝をささげるわけですから、当然人との交わりや様々な活動があります。そこで、いつも覚えたいことは律法の根本精神です。「心を尽くし、思いを尽くし、精神を尽くして、主なる神を愛せよ」が第一にあり、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」が第二といわれました。(マタイ22:34以下)。心から礼拝をささげつつ、友には主の愛をいただいて接したいのです。

安息日が生きて用いられるために、その日に主が高らかにほめたたえ、愛が全うされるよう祈っていきましょう。礼拝が主ですが、目の前に、助けなければならない人がいるならば、安息日でも助けていきましょう。安息日である主日には礼拝をささげることが原則です。仕事が主日に入っている場合には、個人で短い時間でも祈り、賛美し御言葉を読む時間をささげることが大切でしょう。曜日を変えて、教会に来て礼拝をささげることが出来ます。また、安息日である主日に教会内外にあって、愛のわざがなされていくようにと祈りつつ臨んでいきたいものです。安息日についてはイエス・キリストという方のなかに完成しています。ますますこの方から学んでいきましょう。